

スプリント・ボードは若干の膨脹がありますので施工に際して長さ、巾に対して約5厘の間隔を取って下さい。

3. 壁下地に際して

絶えず水に濡れているような湿度の高い場所には使用しないで下さい。又スプリントボードの継ぎの部分には3寸巾程度で結構ですからラスを張りますと更に強度を増します。

シェーピング・ボード

1. 使用釘

モルドや特別のジョインター等はかえって美観をそこないますので、そのまま釘止めするのが費用の点からも徳用と思います。釘打には表面の化粧を崩さない様同一系統色の釘或は掘込みにして表面に現われない様にする等考慮して下さい。

2. 張り方

シェーピング・ボードは、若干の膨脹がありますから約5厘位緩衝間隔を持たせて下さい。此の場合その面に鉤をかけて丸味を与えますと一層の美観を与えま又3尺×6尺の大版をそのまま用いないで3尺×3尺3尺×1尺5寸等使用される部屋の大きさや場所に応

じてその大きさや継ぎ方を変えますと美観が倍加致します。

3. 下地に御注意

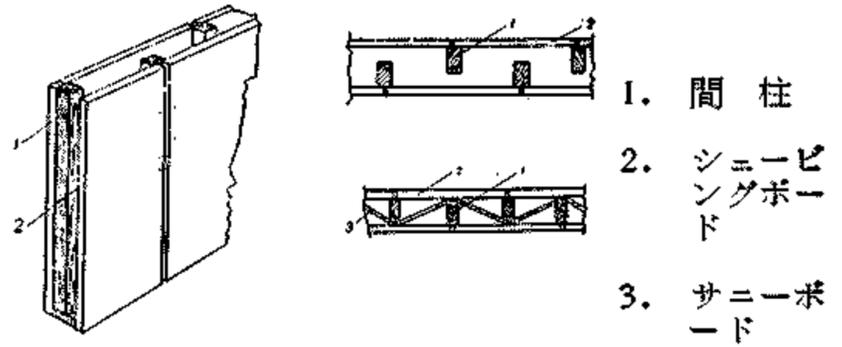
当所で従来の建築にシェーピング・ボードを張りました処間柱の施工が不完全の為故障が出たり、間柱が生材の為狂ってそのため故障を生じた例もあります。

4. 切断

シェーピング・ボードの切断には普通の大工鋸で楽に切れます。角は此の種の材料は欠け易いので御注意下さい。

5. 遮音を与えるには

シェーピング・ボードは保温性はありますが、遮音性はありません。遮音性を持たせる場合には、下図の様な方法もあります。



— 合板課チップボード係 —

シイタケ菌林指1号について

阿 部 豊
小 田 島 輝 一
信 太 寿

I まえがき

シイタケ菌林指1号は各種の作物疎菜果樹などで行われる品種改良法の一つである人為淘汰の繰返しによって生み出されたものである。

原種は1950年苫小牧地方で採集した本道天然産のシイタケで分離、培養、発生を数度繰返しその優良性を順次高めたのである。

北海道は本州の各シイタケ生産地に比べて生育期間が短く、又発生に適する期間も短かいため在来種ではその菌糸生長が遅く、従って発生も遅れ、更に生産量も劣っていたのである。当所ではこの悪条件の本道環境に適合し本州各地に劣らぬ生産量を持つシイタケ品種を固定し、漸く盛んとなってきた本道のシイタケ栽培事業振興に資すべく努力した結果、林指1号菌をうる事が出来た。

以下林指1号菌と従来道内で栽培されている数系統と比較した栽培試験結果から林指1号菌の特質を述べる。尚試験に供したシイタケ各系統とその記号は次の通りである。

D~1	林指1号	R~1	野幌試験場
D~1入北2~a	品種改良中	R~2	
		R~3	
M~0	種菌メーカー	北1~a	本道天然産
M~33		北1~b	
M~204		北1~c	
F~1		北2~a	
F~2		北2~b	
Me~1		北5~a	本州天然産
Mo~1		6~a	
H~1		7~a	
I~1			8~a
K~1			

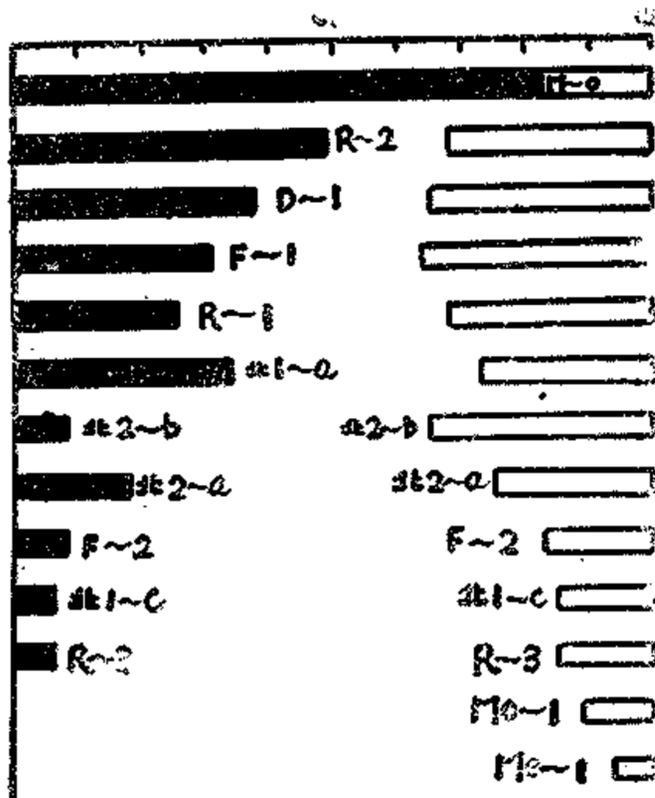
II 特 質

1) 春も秋も発生が多いこと

従来の系統はその子実体の発生が春か秋のどちらかにかたより年一回の収穫に止まるものが多いが、林指1号は春秋両季とも平均して発生し、両季とも発生が多いことがその大きな特徴の一つである（第一図、第二図参照）

注 図中  棒は春季発生量、 棒は秋季発生量を表わし、春秋平均収量の大なる順に並べ最多量系統を10として表わしてある。

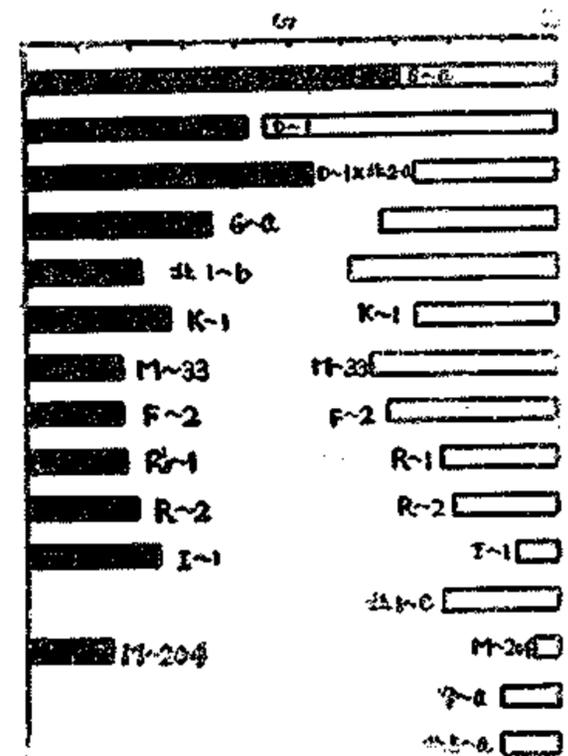
第一図は昭和26年に植え込んだものについて春と秋の樽当り発芽数割合を27、28、29年の3年間にわたって測定した結果を示したものである。



第一図 春と秋の子実体発生数の割合

最も多い発芽数を示したのはM~0で春8.3に対し秋1.7の割合であった。これに対し林指1号は発芽数で

は少し劣っていたが春の発生数 3.8に対し、秋は 3.5で略々同比率であった。



第二図 春と秋の子実体発生数の割合

第二図は昭和27年に植え込んだものについて28年、29年の二年間に測定した結果を図示したもので、最も多い発生数を示したのは8~aで、春7.1に対し秋2.9の割合であった。これに対し林指1号は発芽数では大体同程度であり、発生割合は春4.2に対し秋5.5と同比率を示している。

第1図、第2図に見られる如く他の系統は春か秋のどちらかに偏した発生を示すに対し林指1号は春も秋も変らない発生を示している。

2) 発生する樽木の割合が多いこと

林指1号は他の系統に比較して発生する樽木の率が春秋を通して多い（第一表、第二表参照）

第1表 発生樽率 %

系統	D~1	R~2	R~1	北2~b	F~1	北1~c	M~0	北1~a	北2~a	R~3	F~2
27年秋	79	50	81	60	53	13	32	12	12	0	7
28年春	74	22	0	7	38	0	70	38	5	0	3
28年秋	79	83	44	93	13	93	11	10	27	13	3
29年春	89	67	69	7	88	14	53	79	34	19	4
29年秋	26	69	19	50	25	80	7	10	41	27	8
平均	69	58	43	43	43	40	35	30	24	12	5

第2表 発生樽率 %

系統	D~1	8~a	D~1 × 北2~a	6~a	R~1	R~2	北1~b	I~1	K~1	M~33	M~0
28年春	14	51	24	5	0	0	0	5	0	0	0
28年秋	71	51	51	25	28	35	40	0	5	4	0
29年春	79	74	73	80	84	75	48	55	55	56	40
29年秋	79	52	32	35	24	20	33	10	11	8	1
平均	61	57	45	35	34	33	30	18	18	17	13

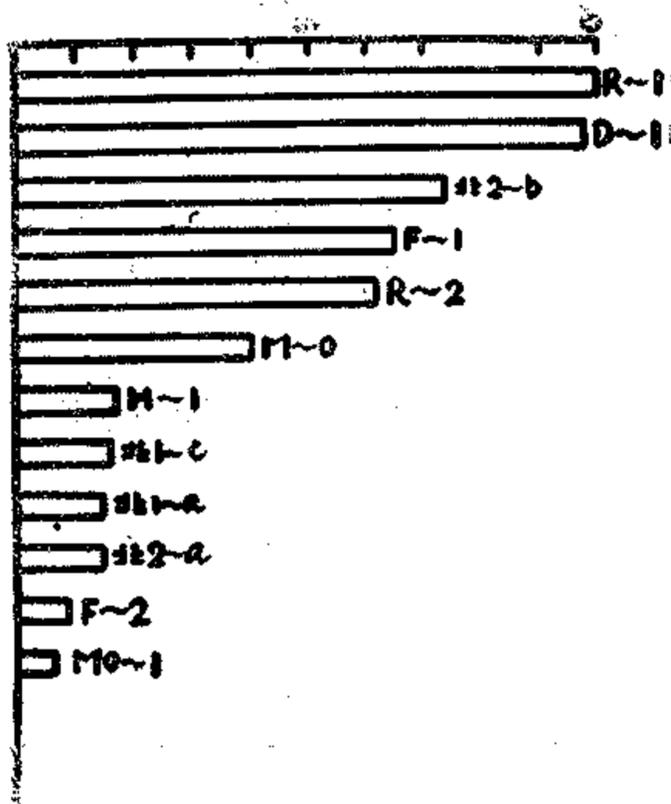
第一表は昭和26年に植え込んだものについて春と秋の現有櫛木に対する発生櫛木を三年間にわたって測定した結果を示したものである。最も多い発生率を示したのは林指1号で三年間平均69%で他系統では R~2 の58%が此れに次いでいた。

第二表は昭和27年に植え込んだものについて二年間の測定結果を示したもので、最も多い発生率を示したのは林指1号で二年間平均61%であり、次は8~aの57%であった。第一表、第二表に見られる如く、林指1号は春秋共平均した発生率を示し、且年間平均の発生率が他系統より優れている。

3) 発生が早いこと

従来の系統では、本道に於ては植込3~4年目でなければ本格的発生をみないものが多いが、林指1号は植込翌年に於て既に比較的多量の発生をみる。

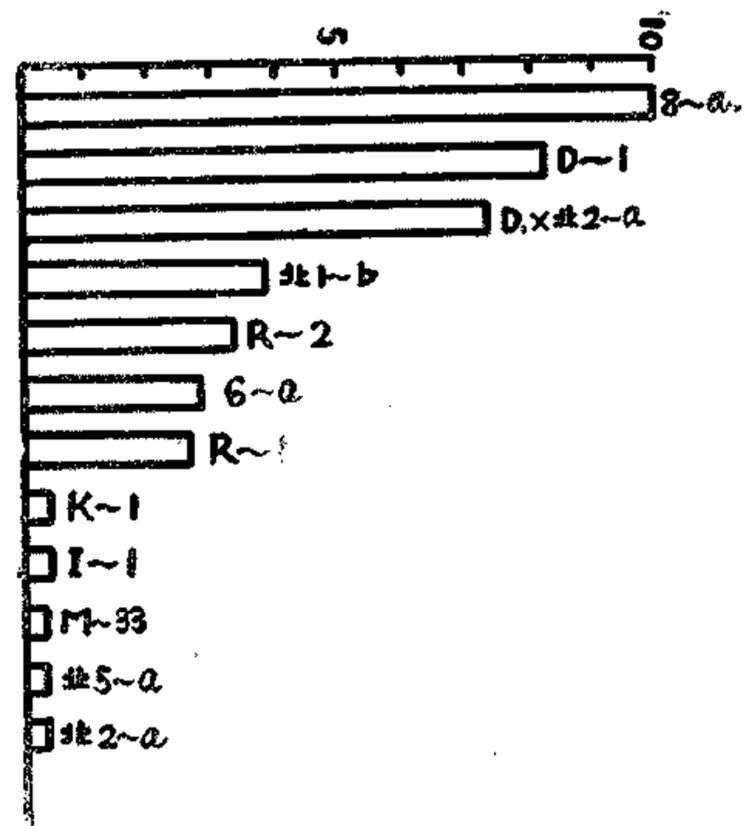
第三図は昭和26年植込のもので、昭和27年一年間に発生した櫛木の春秋平均発生率を示したものである。これによると植込んだ15系統の中、発生したものは12系統で最も多い発生率を示したのはR~1で41%、次いで林指1号が殆んど同率の40%であった。



第三図 植込翌年の発生割合

第四図は昭和27年植のもの昭和28年一年間の結果を示した。

これによると20系統中発生したものは12系統で最も多い発生率を示したのは8~aで51%、次いで林指1号の41%であった。

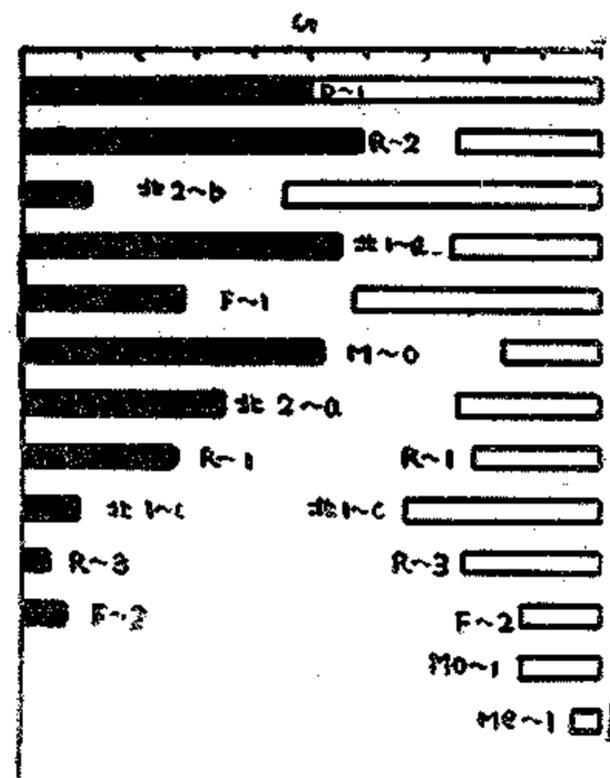


第四図 植込翌年の発生割合

第三図、第四図よりみられる如く林指1号は菌系の活着、伸長が優れていて、発生が早い系統に属する。又上川地方に於ても満一年で子実体が発生しハシリの時から多量の発生をみせる。

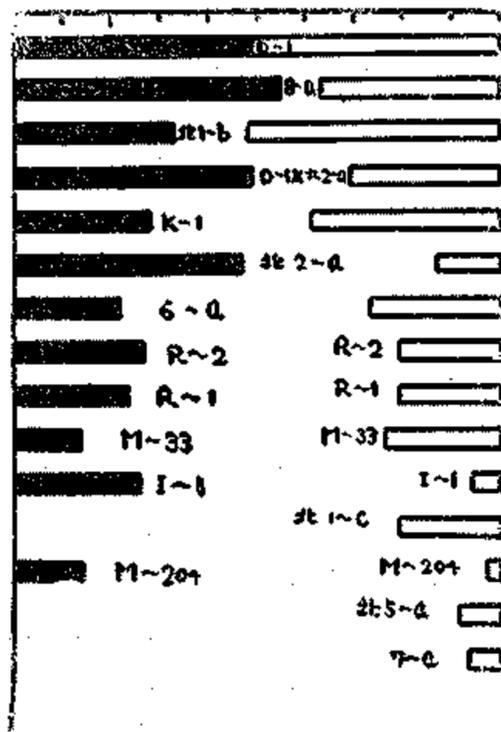
4) 発生量が多いこと

林指1号は他系統より発生量が多く且つ春秋平均して発生している。



第五図 発生重量割合

第5図は昭和26年植えこみのもので、発生櫛木当りの発生生重量の3年間の平均結果を春秋別に図示したもので、これによると最も多いものは林指1号で春109g、秋99g、次でR~2の春118g、秋52gである。



第6図 発生重量割合

第6図は昭和27年植えこみのもので2年間の平均結果を図示したものである。

最も多いのは林指1号の春79g、秋84gであり、次では8~aの春90g、秋20gである。

第5図、第6図にみられる如く林指1号は他系統に比して楢木当りの発生が多い。

Ⅲ か た ち

以下林指1号と他系統の子実体について比較してみる。

1) キノコの各部分の大きさ

第3表 子実体各部の大きさ

系 統		D~1	北1~a	M~33	K~1	M~0	8~a	北2~a	D~1 × 北2~a	北1~b
菌 傘 直 径	cm	5.1	5.5	4.3	4.7	4.0	4.3	5.7	4.3	5.6
菌 柄 長	cm	3.2	2.8	2.4	2.8	2.4	2.7	3.6	2.9	3.9
菌 柄 直 径	cm	1.1	1.1	1.2	1.0	0.9	1.0	1.2	1.0	1.1
肉 厚	cm	1.2	1.3	1.0	1.3	1.1	1.2	1.4	1.1	1.4

第3表はキノコの各部分の大きさの平均値で林指1号は $\frac{\text{菌柄長}}{\text{菌傘径}} = 0.63$ で菌傘直径に比べて菌柄長のや

長い傾向がある。

2) キノコ傘の直径と柄の長さの分布

第4表 菌傘径、柄長の分布

系 統		D~1	北1~a	M~33	K~1	M~0	8~a	北2~a	D~1 × 北2~a
傘 径 直 径	1寸以下 %	9	4	5	13	22	22	8	21
	1.0~1.5寸	30	16	63	43	47	39	24	39
	1.5~2.0寸	34	51	25	20	26	24	16	26
	2.0~3.0寸	26	27	7	24	5	14	52	13
	3寸以上	1	2	0	0	0	1	0	1
菌 柄 長	1寸以下 %	42	20	87	56	83	67	24	59
	1.0~1.5寸	57	80	12	44	17	33	76	40
	1.5寸以上	1	0	0	0	0	0	0	1

第4表は傘径直径と菌柄長の各寸法に於ける割合を示す。

林指1号は1寸~3寸までの間に広く分布しており、選別によっては有利な出荷が得られると思われる。

Ⅳ 補 足

次に参考として道内に於ける楢木伏込概数と当指導所に於けるシイタケ種菌道内領布状況を示す。

第5表 道内榎木伏込数

支庁別	年度	昭和	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	計	%
		20年										
石狩 渡島 松山 後志 空知 上川 留萌 宗谷 網走 胆振 日高 十勝 釧路 根室	狩島			0.5	1.4	7.1	91.9	88.4	77.0	47.0	313.3	6.2
	山志			8.3	3.8	22.9	134.0	103.1	55.9	32.0	360.0	7.1
	知川			1.1	1.4	12.8	77.3	86.8	102.6	42.0	324.0	6.4
	川			1.5	6.2	7.3	58.4	43.8	19.1	13.6	149.9	3.0
	上	0.1	0.1	15.6	3.4	7.0	77.6	57.3	14.7	11.8	187.6	3.7
	留			2.7	7.2	5.3	80.0	78.1	22.9	19.4	215.1	4.3
	宗				0.5	5.0	15.1	28.3	2.9	5.7	57.5	1.1
	網			0.1	0.1		3.4	5.5	8.2	6.6	23.9	0.5
	胆			12.5	11.9	11.6	107.6	174.7	91.7	155.5	565.6	11.2
	日	0.6	3.2	34.8	82.8	140.6	450.0	193.1	165.3	147.3	1217.0	24.1
	十		0.1	3.8	6.2	7.6	137.3	123.7	40.7	151.5	471.4	9.2
	釧			15.7	2.9	9.8	175.3	156.5	99.1	63.8	523.1	10.4
	根			65.8	55.3	72.4	163.4	26.2	47.1	56.0	486.3	9.6
計			2.5	0.3	0.3	111.8	23.5	14.3	11.5	164.2	3.2	
計		0.7	3.4	164.8	183.4	309.5	1682.7	1189.1	761.6	763.6	5058.8	100

単位は千本

第5表は支庁別榎木伏込概数である。支庁の中には市も含み、榎木は3尺換算数とし、千本単位に表わした。

R~1系統、昭和29年、30年は林指1号系統である。榎木換算数は種菌1スポンで榎木80本に植えられるとして計算し千本単位で示した。

—研究部第三課—

第6表は支庁別シイタケ種菌頒布表で、昭和28年は

第6表 指導所種菌頒布表

支 庁 別	年 度	昭 和 28 年		29 年		30 年 予 定	
		スポ ン ケ	榎木換算数 千本	スポ ン ケ	榎木換算数 千本	スポ ン ケ	榎木換算数 千本
石狩	狩島	447	35.8	41	3.3	394	31.5
渡島	山志	100	8.0	69	5.5	108	8.6
松山	知川	0	0	27	2.2	114	9.1
後志	川	15	1.2	118	9.4	135	10.8
空知	上	45	3.6	150	12.0	264	21.1
上川	留	81	6.5	159	12.7	239	19.1
留萌	宗	0	0	9	0.7	109	8.7
宗谷	網	0	0	27	2.2	71	5.7
網走	胆	125	10.0	281	22.5	281	22.5
胆振	日	100	8.0	31	2.5	46	3.7
日高	十	10	0.8	44	3.5	37	3.0
十勝	釧	12	1.0	40	3.2	117	9.4
釧路	根	15	1.3	20	1.6	47	3.8
根室	計	50	4.0	0	0	88	7.0
計		1001	80.1	1016	81.3	2050	164.0

シイタケ菌林指 1 号について

阿 部 豊
小 田 島 輝 一
信 太 寿

まえがき

シイタケ菌林指 1 号は各種の作物疎菜果樹などで行われる品種改良法の一つである人為淘汰の繰返しによって生み出されたものである。

原種は 1950 年苫小牧地方で採集した本道天然産のシイタケで分離、培養、発生を数度繰返しその優良性を順次高めたのである。

北海道は本州の各シイタケ生産地に比べて生育期間が短く、又発生に適する期間も短いため在来種ではその菌糸生長が遅く、従って発生も遅れ、更に生産量も劣っていたのである。当所ではこの悪条件の本道環境に適合し本州各地に劣らぬ生産量を持つシイタケ品種を固定し、漸く盛んとなってきた本道のシイタケ栽培事業振興に資すべく努力した結果、林指 1 号菌をうるることが出来た。

以下林指 1 号菌と従来道内で栽培されている数系統と比較した栽培試験結果から林指 1 号菌の特質を述べる。尚試験に供したシイタケ各系統とその記号は次の通りである。

D~1	林指 1 号
D~1 入北 2~a	品種改良中
M~0	種菌メーカー
M~33	
M~204	
F~1	
F~2	
Me~1	
Mo~1	
H~1	
I~1	
K~1	
R~1	野幌試験場
R~2	
R~3	
北 1~a	本道天然産
北 1~b	
北 1~c	
北 2~a	
北 2~b	
北 5~a	本州天然産
6~a	
7~a	
8~a	

特 質

1) 春も秋も発生が多いこと

従来の系統はその子実体の発生が春か秋のどちらかにかたより年一回の収穫に止るものが多いが、林指 1 号は春秋両季とも平均して発生し、両季とも発生が多いことがその大きな特徴の一つである（第一図、第二図参照）

注 図中 ■ 棒は春季発生量、□ 棒は秋季発生量を表わし、春秋平均収量の異なる順に並べ最多量系統を 10 として表わしてある。

第一図は昭和 26 年に植え込んだものについて春と秋の楢当り発芽数割合を 27、28、29 年の 3 年間にわたって測定した結果を示したものである。

第一図 春と秋の子実体発生数の割合

最も多い発芽数を示したのは M~0 で春 8.3 に対し秋 1.7 の割合であった。これに対し林指 1 号は発芽数では少し劣っていたが春の発生数 3.8 に対し、秋は 3.5 で略々同比率であった。

第二図 春と秋の子実体発生数の割合

第二図は昭和 27 年に植え込んだものについて 28 年、29 年の二年間に測定した結果を図示したもので、最も多い発生数を示したのは 8~a で、春 7.1 に対し秋 2.9 の割合であった。これに対し林指 1 号は発芽数では大体同程度であり、発生割合は春 4.2 に対し秋 5.5 と同比率を示している。

第一図、第二図に見られる如く他の系統は春か秋のどちらかに偏した発生を示すに対し林指 1 号は春も秋も変らない発生を示している。

2) 発生する楢木の割合が多いこと

林指 1 号は他の系統に比較して発生する楢木の率が春秋を通して多い（第 1 表、第 2 表参照）

第 1 表 発生楢率%

第 2 表 発生楢率%

第1表は昭和26年に植え込んだものについて春と秋の現有楢木に対する発生楢木を三年間にわたって測定した結果を示したものである。最も多い発生率を示したのは林指1号で三年間平均69%で他系統ではR~2の58%がこれに次いでいた。

第2表は昭和27年に植え込んだものについて二年間の測定結果を示したもので、最も多い発生率を示したのは林指1号で二年間平均61%であり、次は8~aの57%であった。第1表、第2表に見られる如く、林指1号は春秋共平均した発生率を示し、且年間平均の発生率が他系統より優れている。

3) 発生が早いこと

従来系統では、本道に於いては植込み3~4年目でなければ本格的発生をみないものが多いが、林指1号は植込み翌年において既に比較的多量の発生をみる。

第三図は昭和26年植込みのもので、昭和27年一年間に発生した楢木の春秋平均発生率を示したものである。これによると植込んだ15系統の中、発生したものは12系統で最も多い発生率を示したのはR~1で41%、次いで林指1号が殆ど同率の40%であった。

第三図 植込み翌年の発生割合

第四図は昭和27年植のもの昭和28年一年間の結果を示した。

これによると20系統中発生したものは12系統で最も多い発生率を示したのは8~aで51%、次いで林指1号の41%であった。

第四図 植込み翌年の発生割合

第三図、第四図よりみられる如く林指1号は菌系の活着、伸長が優れていて、発生の早い系統に属する。又上川地方に於いても満一年で子実体が発生しハシリの時から多量の発生をみせる。

4) 発生量が多いこと

林指1号は他系統より発生量が多く且つ春秋平均して発生している。

第五図 発生重量割合

第五図は昭和26年植込みのもので、発生楢木当りの発生重量の3年間の平均結果を春秋別に図示したもので、これによると最も多いものは林指1号で春109g、秋99g、次いでR~2の春118g、秋52gである。

第 6 図 発生重量割合

第 6 図は昭和 27 年植込みのもので 2 年間の平均結果を図示したものである。
最も多いのは林指 1 号の春 79g、秋 84g であり、次いで 8～a の春 90g、秋 20g である。
第五図、第 6 図にみられる如く林指 1 号は他系統に比して楢木当りの発生が多い。

かたち

以下林指 1 号と他系統の子実体について比較してみる。

1) キノコの各部分の大きさ

第 3 表 子実体各部の大きさ

第 3 表はキノコの各部分の大きさの平均値で林指 1 号は 菌柄長 / 菌傘径 = 0.63 で菌傘直径に比べて菌柄長のやや長い傾向がある。

2) キノコ傘の直径と柄の長さの分布

第 4 表 菌傘径、柄長の分布

第 4 表は傘径直径と菌柄長の各寸法における割合を示す。

林指 1 号は 1 寸～3 寸までの間に広く分布しており、選別によっては有利な出荷が得られると思われる。

補 足

次に参考として道内に於ける楢木伏込概数と当指導所におけるシイタケ種菌道内領布状況を示す。

第 5 表 道内榎木伏込数
単位は千本

第 5 表は支庁別榎木伏込概数である。支庁の中には市も含み、榎木は 3 尺換算数とし、千本単位に表わした。

第 6 表は支庁別シイタケ種菌領布表で、昭和 28 年は R~1 系統、昭和 29 年、30 年は林指 1 号系統である。榎木換算数は種菌 1 スポンで榎木 80 本に植えられるとして計算し千本単位で示した。

研究部第三課

第 6 表 指導所種菌領布表